

大鹿スケッチ

2011
如月
前志満くみ
第21号

ここの所、朝の気温はマイナス十度以下という日が続いています。大寒を過ぎて仕込んだ凍り大根は日中の日差しを受けても凍ったまま。実に冬の寒い冷え込み具合でスカッとします。小さい頃は冬でも外でよく遊ぶのでもやけに悩まされ、いろいろと民間療法を試してみたなかで一番効くのは、栗の木などで越冬しているアブラムシの卵をそぎ落とし、それを湿布する治療法だったことをふと思い出しました。昔の人は、限られたモノの中で実にたくましく生きてきたものです。



大鹿HeatBeat

第18回 ~ 大鹿の人々

紙谷 正 さん (85)

日当たりのいい斜面ではふきのとうが顔を出し始めマンサクの蕾も膨らみかけています。日中は日差しがあればお家の中より外の方が過ごしやすくてそんな小さな春を見つけることに喜びを感じながら紙谷さんは桑の選定、柵の補強、雑木林の手入作業を行います。どんなお仕事もそうですが段取り8分。農始めに向けての下準備です。その昔、養蚕農家の女性の農閑期の仕事としてくず繭を使い、半纏などを作ることがあったようです。くず繭でも昔は大切に使っていましたが今ではほとんどが捨てられています。昨年あるお客様に紙谷さんのくず繭をお送りしたところ素敵なストールに変身していました。軽くて暖かくとても重宝しているとのこと。来年度は右馬允のお土産コーナーに登場するかもしれません。↓↓

1月22日浜松市街地のモール街で行われた「軽トラ市」に「まんまる農園」のまきさんと参加して参りました。これはかつての「三遠南信」の経済交流の再考とともに商店街の活性化を図って初開催したもので3月まで月に1回行われます。朝3時に大鹿村を出て南信濃、兵越峠を越え浜松市街地に到着したのが7時。およそ4時間の旅。浜松から毎シーズン来てくださるお客様はあまりに軽やかにいらっしやるのでこれまで大鹿までの道のりの長さをあまり考えずに行きましたが、改めて大鹿村を選んでくださる皆様をありがたく感じる事ができました。さて、この季節、農産物としては品薄な大鹿村ですが、干し野菜や、ジャム、お米、豆もち、こんにやくなど販売し、お陰様でまずまずの売れ行きとなりました。また大鹿村をご存じない方との交流も新鮮で、レジャーシーズン前に観光のPR、まんまる農園さんもお野菜のPRなど繁農期に向け、良い「種まき」ができました。帰りには秋葉様をお参りしその昔、秋葉街道を人々が盛んに行き来していた時代に思いを巡らせて参りました。

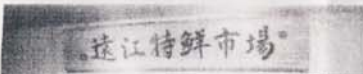


最近、木造校舎を守る活動が全国的に流行っているようですが皆さんのお住まいの地域ではいかがでしょうか。大鹿村にも今まで建物の近代化とともに惜しまれつつ姿を消していった校舎たちがあります。そんな中、唯一のここののがJAの支所兼、倉庫に使われている旧大河原尋常小学校です。しかしこの度、JAの縮小化、建物の老朽化に伴って建て壊しが決まりつつあります。

今回はそんな大河原小学校の歴史を振り返ります。明治19年の小学校令公布を受けて、大河原学校は名称を大河原簡易小学校と変更しました。明治20年当時、香松寺を校舎として使用していましたが、諸業務に支障をきたすようになったため、明治23年、大鹿村役場は大河原簡易小学校校舎移転を長野県知事に申請し認可されたので翌年香松寺借用校舎から現在地に移転しました。資金は村の積み立て建築資金はそのほとんどが、大河原区民が積み立てた寄付金でまかなわれました。予定では共有山林を売却し資金にする予定でしたが、転売事件が起こり断念しています。伊那谷各地の歴史をみてもこの時代に校舎が盛んに行われていますが同じように土地転売の問題が上がり資金繰りに大変苦労しています。これも第一次世界大戦の何らかの影響があったためでしょうか。その後大正5年に新校舎が完成。久原工業株式会社の製材事業の発展による外部からの入村、小渋川水電工事関係者の家族が増えるに従い、児童生徒も新校舎開校時は270名だったのが、大正14年には過去最高の603名まで増えたため、2階建4教室が増築されました。これが今に残る校舎の姿です。時代が移り昭和16年「国民学校令」により大河原尋常高等小学校は大河原国民学校と改称され、昭和32年に老朽校舎の指定を受け改築されることになりました。第一次、第二次世界大戦、そして戦後復興という時代を駆けぬけた旧大河原小学校校舎は大河原の近代史が刻まれた遺産といえるでしょう。



東海地域にお住まいの皆様にお知らせ



浜松市街地のモール街のザゴの地下に大鹿の物産を置かせていただくことになりました。現在はゼロ地場の「ゼロ米」と銀なんが並びます。新鮮なお野菜は難しそうですが、いろいろと工夫して大鹿村の物産をPRしていきたいと思えます。近隣の安心安全な物産も並んでいますのでお近くにお立ち寄りの際にはのぞいてみてください。



眺めは赤石岳の雪渓。雪の解ける速度を観察しながら農始めを知る。



農村のエコライフ♥
冬は日差しがあれば外の方が温かいので日だまりで針仕事。

1760年代にイギリスで始まったとされる「産業革命」。戦後の日本でも急速に産業化が進み人々の暮らしぶりも「共同社会」から「利益社会」へと移り変わります。ここ伊那谷はそんな中でも住民同士の協力体制が温存され、伝統文化や、そのままの自然が残されてきました。しかし、とうとう伊那谷にも産業化の波が押し寄せようとしています。現在JR東海の独自事業として進めているリニア新幹線計画。大鹿村でも村内2か所の露出が想定されています。村の中では、だんだんと住民の間に不安の声が広がりつつあります。工事現場では現地処理が鉄則だという「土砂」のこと、山は水ガメ「水源の枯渇問題」、「送電線の健康被害」、「景観問題」、「観光への影響」…大切なことが議論されず、「ルート決定」が目下推し進められています。日本列島の中でも南アルプスは、地層の構造上から固有の植物、また動物が多く生物多様性が極めて高い地域といえます。コップテン議長国で、世界の先頭を切って取り組みをしなければいけない日本が今、なぜ南アルプスに長大なトンネルを開ける事業を容認しようとしているのでしょうか。「土地買収面積が少なく、直線距離で工事建設費も安く上がるためルートが最も費用対効果大きい」さすが利益社会の申すこと。お金に換算する術はさすが。しかし、彼らは南アルプスに穴けることによる環境への「費用対効果」を算出してみようとは思わないのでしょうか。